

関西農業史研究会々報

No 14 - 1980.6.28

第28回例会は、8名の参加でもって5月24日に開かれました。当日は、初めに田光夫氏より『耕稼春秋』の歴史的背景(1.前田藩の所領と統治、2.走り百姓の出現とその対策、3.地方知行をめぐる給人と農民、4.初期の改作法の展開、5.加賀藩農業の動向)の報告があり、続いて堀尾尚志氏の報告があった。ここでは、堀尾氏の報告要旨を掲載します。(なお、我々の都合で一部略した事をお詫びします。)

第28回例会 堀尾尚志氏

『耕稼春秋』一成立、およびそのにみよる技術の展開

(1) 著者の身分、十村について (略)

(2) 『農業全書』と本書の成立

本書の自序にある宝永4年は、『農業全書』公刊からちょうど10年あとのことである。そして、本書には『農業全書』の影響が多分に認められる。

順序が入れ変わるが、この影響を説明するために、まず、本書の構成を簡単にみておきたい。本書は次のように3つのブロックに分けられる。

① 巻1～3、巻7……が加賀(ことに石川郡)における各作物の栽培法および農事そのものを扱った部分。そこに書かれたとお

りにやってみれば、まがりなりにも一定の耕作ができるという、
いわばハウトウ式のもの。

②巻4、5……農業技術の部門別に整理し、技術そのものや當農、
農業について論じている。ここでは、読者にある程度以上の思
考を求めたり、農業や農業技術に対するものの考え方を身につ
ける上で、基礎的な事柄が述べられている。

③巻6……検地など行政関係の知識が記述されている。

さて、『農業全書』の影響は、巻3から巻5まで巻を追うごと
に多く見られ、巻5などはその抜萃といってもよいくらいである。
数多くの畑作物の書かれている巻3では、工業作物の記述にその
影響が見られ、巻4では、項目の立て方、それぞれの項目への引
用からみて、『農業全書』があつてこそ、この巻が体系をなした
ことがわかる。

ちなみに、又三郎の手持ちの材料だけでは、体系的な記述がで
きなかったところを、『農業全書』の助けをかりることによつて、
初めてなしたといえる。それは、ちょうど安貞が中国の農書の
助けをかりて、彼の著書を体系立てたのと同じであつたといえよう。

(3) 地域性の強調

巻4、5におけるように、農業技術をある程度一般化してとらえ
ようという志向があるものの、具体的な栽培法の記述ではあくま
で加賀の地域性に即して記述するという方針が貫かれている。そ
して、『農業全書』に書かれていることが、加賀では必ずしもそ

のとおりにはかないことを指摘している。そのことは、当時すでに相対に知られるようになっていた『農業全書』への、単純な追従があらわれはじめていたが、或いは、そういう事への心配が著者の脳裏に去来していたのではないだろうかと思えるのである。

(4) 著者の技術普及観

前に本書の構成を述べたが、そのオ1の部分からも、未だ自立していない小農民の育成に照準を合わせていたことがわかるのである。しかし、彼らが直接の読者対象であったとは考えられないから、これを伝達する者が必要である。当然考えられるのは十村をはじめとする村役人層であるが、ここで注目せねばならないのは、本書の中α次のようなくたりである。すなわち「…百人に四五人も耕作に心を入、色々手を加へ、或いはよく異様成専を求植試す百姓考へし」(巻4)とか、「…上農は七様の事まで考たまもαせ」(同)とある。必ずしも村役人層というような限定をせず、精農とか上農といった百姓をも読者対象としてとらえていたことがわかる。そして、地域全体の技術水準を向上させるうで、彼らを「中核農家」としてとらえていたといえよう。

(5) 作付ローテーションと農作技術の重視

本書にみられる作付ローテーションは、図(略)に示したような2年を1周期とする高度なものである。

石川平野は手取川の作った広大な扇状地で大変排水が良い、一方、手取川の水量の減る夏期を除けば水利は良い方で、ことに水

の必要な春期には雪どけの水を集めて流れる川の水量は豊富である。そして、大田市全沢での野菜の需要と、そこで生じる糞尿の代償としての必要、こうした条件がそろって、かかる技術が生み出された。

本書では、麦茶種をはじめ農作物に関する記述が詳しい。これと小農民育成と関係する点であるが、小農民の自立そして茶種を中心に農作が発展していったその後の加賀藩農業の動向を支配したものであった。この点が、以降、数多くの写本を生み、多くの者に読まれた由縁である。時代は下って天明6年(1781)に『耕作大要一麦茶種條理』という農作専門の農書が書かれている。本書に示された技術の発展方向の上でこの農書をとらえる必要がある。

(6) 農具について

農具の図と説明に全巻が当てられている巻7は、巻1〜3と一体のものとするべきである。このようにした農具は巻1〜3に記されている農作業に必要なもので、それ以外のものは何も出てこないからである。

農具に1巻をあてて著者の意図は、自作すべし農具には作り方の要点と、購入すべし農具には価格を記して、農具を揃えてゆくこととする者にとって便利なカタログを用意することにある。また、地方でそれまでの家父長的地主経営から地主自作経営へと変わり、小農民が自立してゆくという労働構造の変化の前に、労力手配たる農具への積極的な関心を示すものであるといえよう。

なお、千両扱までは出てこない。千両扱までは正徳年間からこの地方で使用が広まってゆくが、この購入によって秋の労働セーフがくずさる更に農作が拡大してゆく直前の段階に本書があった。

(7) 技術の社会性

作付ローテーションは高いものであったが、それは長年にわたって農民の工夫と経験で築きあげられてきたものであった。しかし、その技術を生かして百姓が経済合理的に麦畑作や農作を拡大することはままならなかった。米生産を第一義とする藩にあっては、水田面積の減少や地力の減退を防ぐために、なにかと規制した。

本書の著者は、畑作物の栽培技術の向上のために多くの丁をささ、また労力として地力のうえから農作に通正規模のあることを正しく掲げる技術的なトータルバランスを説いている。ところが、一方で地力の維持や労力の余裕という点から米生産の第一義たる事を説き、農作の拡大に否定的である。農作によって小農経営を安定させようとする一方で、藩の農作規制への理論的支援を行なっているのである。この事を言い直せば、技術の認識が正しいものであるならば、生産者の利益に資する事ができると同時に支那の目的の有効な武器を提供することとできる。この双方の創の性格が技術には宿命にある。耕種春秋もまた、同じ宿命にあった。